革共同「歴史理論による日本帝国主義の一考察」

深まりゆくアジア危機と紀元節

「天皇制ボナパルチズム論」　武井健人他

反戦高協中央書記局編

序

一九七十年一月八日、沖縄全軍労は新年才一波四十八時間ストに突入した。六九年における本土復帰の斗いをリードし、沖縄における階級斗争をその最大規模で担い斗つた全軍労にかけられた二千四百人にのぼる首切り攻撃は沖縄基地の強化とさらには経済的抑圧をめざしたものである。それは才一に基地労仂者＝全軍労が巨大な斗う力として登場したことにより、極東戦略におけるキーストーン（要石）としての沖縄基地がその機能をはたせなくなるという危機にさらされたことを打開し、さらに沖縄を席巻する反基地、反権力斗争をも沖縄階級斗争の主力としての全軍労をたたきつぶすことによつて徹底的に弾圧する為にである。才二に年約四千人の青年労仂者を生み出している沖縄は、若年労仂力の開発の為に農村を解体し終つた日本ブルジョアジーにとつてはまさによだれの出るところなのだつた。事実基地労仂者の新雇用が無くなつたとなると約二千人から三千人の新雇用希望の青年が沖縄での職場を得られなくなるのであり、約三分の二の就職希望者は本土に流れざるをえなくなるのでありかつ現実的である。すると沖縄は七十年代前期において日本一の過疎県になる予定なのである。このことは沖縄の現地産業を破壊し、経済的格差をより一層ひどいものにするのである。

一月十九日午前零時、全軍労は再度の、それも百二十時間におよぶ空前のストライキ斗争に決起した。八十ケ所のゲートにピケがはられ、八千人にのぼる労仂者がスクラムをくんだのである。米軍はストを前にして「コンデイシヨン・グリーン」（地上防衛体制）を発動し、米兵の部隊集結、外出禁止をもつて内乱に対応する様な姿勢を示した。そして発砲を初めとする挑発行為はあらゆる地点での激突を生み、多数のけが人や逮捕者が出る中でこの斗いの泥沼的＝革命的前進を促している。ここにこそ七一年代の日本階級斗争を牽引する力があることが確信されるのである。

かつまた、本土において11月決戦以後、これをも含めて「六十年代型階級斗争」との訣別こそが七十年斗争の幕を開くものであるとの確認は、沖縄における全軍労の斗いに媒介されつつ反戦派労仂者の中にいまにない確信をもつて「バリケード春闘」が語られている階級斗争の本隊である労仂者のケルンとしての反戦派は、ＩＭＦ＝ＪＣ・同盟の右翼的切りくずし、社会党の総選挙における惨敗による総評の動揺、宝樹一派との斗争を貫徹しつつ、春闘へ反戦派的創造性を発揮しつつ、11月決戦の質そのものの職場への直接的もちこみ＝「バリケード春闘」へ進撃している。いままでの時限スト指令それもたぶんは物取りによつて中止されるといつたものに対し、日本労仂運動の内に秘められた荒々しい経験を生し、サボ・ピケ・スト・バリといつた発らつとした斗いがかならずや実現されるであろう。

だが、しかし、日本共産党＝スターリニストは反戦派労仂者に対し限りなき憎悪をもつてのぞんでおり、各職場での二重処分やトロツキスト攻撃は一段の激しさを加えている。総選挙における社会党の激減、日共の若干の伸びによつて議会内における勢力差の縮みがいわゆる「社共共闘」をより現実化させ、社民の日共による切り崩しが始まらんとしている。

だが、社民の改良主義に全面的に屈服し、これの右翼的防衛によつて自らの位置を保つといつた反動的立場に転落した才二スターリ

ニスト＝革マル派が反戦派と社民の間のくさびとして決定的な反動的役割をはたしている。動労を中心としてはびこる革マル派は、国鉄五万人合理化に対する社民の屈服に同調し、その体制内的性格と教育斗争論等に代表される徹底的改良主義を貫徹し、社民の右に自らを置くことに一片の疑問すらもたないのである。高校戦線においても一月七日の青山高襲撃をもつて武装反革命としての本格的発場を開始した。十・二一青山斗争においては「ブクロの社会問題化路線反対」といつたスローガンをかかげて敵対して来た革マル派＝反戦高連は一月七日、三十名の部隊をもつて「ブクロの日帝打倒路線による才一次青山斗争は破算し終了した。今度は反戦高連による才二次青山斗争である」ことを宣言して青山高校へやつて来た。だがそこにいた二名の反戦高協青山高支部員によつて実力で排除され、次々にかけつけた反戦高協の部隊によつて放逐されたのである。当の青山高マル研に巣くう革マル若干名はこの事態に自己批判を要求されてたじたじとなり、「明日までに考えてくる」と言つて引こんでしまつた。当然にも彼らは最後のあがきを行うところとなり、高校戦線における武装対決も常識となるであろう。今回の青山高校の事態を我々によつての革マル派放逐戦の不徹底として反省し、全国において才二スターリニスト＝革マル派殲滅を本格化せねばならないことをあらためて知らせるものとしようではないか。

1　戦後日本帝国主義と紀元節

ところで以上の様な情勢を背にして四度目の「建国記念の日」が訪れてくる。二月十一日紀元節が復活されたそもそもの理由はどこにあるのか。それは才一に六五年日韓条約締結以来日本帝国主義の本格的対外膨張を国内において「排外主義及び国家主義イデオロギー」等の注入によつて保完する為である。才二にはその為の手都として「紀元節の復活」といつた陳腐な材料までをも持ち出さなければならない日本帝国主義の追いつめられた立場である。才三には、しかしながら、もしこのことが日本帝国主義の意図通り貫徹されたならば「陳腐」などと言つてのけそつて笑つているどころか、戦前型の超反動期を呼びさましてしまうのである。また日本帝国主義のねらいはまさにそこであり、ここまで行つて国内への反動的再編を行なわなければ自らの延命も保障しえない危機的様相は明らかである。

さて以上のことを戦後日本帝国主義の歴史の展開の中によりはつきり見ることが出来る。

才二次大戦において圧倒的な物量を誇る米帝国主義軍の下に日本帝国主義は敗退した。そのことは同時に戦前から最強暴な天皇制ボナパルチズム権力を崩壊せしめた。軍の解体、経済の無政府化とブルジョアジーのサボタージュ、労仂者による生産の自主管理等は前革命的情勢を生んだ。しかしながら「汚れなき？」日本共産党は野坂参三のかの有名なる「米軍＝解放軍」規定やら、才二次帝国主義世界戦争の「民主主義とファシズムの斗い」の美化によつて裏切りの遍歴をかさねるのであつた。戦後革命は敗北し妥協の産物としての戦後民主主義を生んだのである。日本帝国主義はそれ以後の政治過程を安保強化によつてのりきり、六十年安保以後池田の高度成長政策をもつて本格的帝国主義として胎動しはじめたのであつた。そして具体的には六五年日韓条約締結をもつて対外膨張の才一歩をしるすのである。ところで帝国主義としての抬頭は当然にも戦後革命敗北期における妥協の産物としての議会制民主主義との矛盾をあらわにし、かつなしくずし的に破壊をもしていくのである。

それが天皇制ボナパルチズムの下の強権支配を憧憬する政治的蒙昧主義と結合したところに紀元節の復活が行なわれたのであつた。

2　深まりゆくアジア危機の中で

ところで紀元節復活がブルジョアジーによつて意図され、かつ六六年十二月の国会で決議されたとき以上に情勢は危機的様相を深めており、紀元節復活の意味性もまた現実性をよりおびてきたのである。

才一にベトナム侵略戦争の進行は六七年十月八日をもつて日本帝国主義の参戦国化、核武装化への道を切り拓いたのであるが、にもかかわらずベトナムにおける米帝国主義への敗勢は全人民の前に明らかなのである。このことは後進国半植民地支配の崩壊を目の当たり見せるものである。

才二にベトナム戦費を一方の軸として進んだドル＝ポスド危機はその本質における米帝国主義の経済的地位が相対的に低下したこととかつ金準備が圧倒的に流出したことによるドルのキー・カレンシー（基軸通価）からの転落を生んだ。連鎖的におこつたドル・ポンド・フラン危機、金恐慌はポンド、フランの切り下げ、マルクの切り上げ、金の二重価格制によつて疑似的に解決はされたものの本質的解決はなに一つあたえられていないことによつて国際経済を恒常的不安定へとかりたてている。

才三にベトナムにおける米帝国主義の敗勢が東南アジア各地における挑発行為を生み、特に朝鮮半島の危機性はいまになく深化しているのである。才三選問題や経済借款の返済期の到来、国内の重税、高物価、汚職問題がいまや爆発への期を待つて虎視眈々としているのである。

才四に以上の事態にそなえるべく日本帝国主義は才四次防衛計画の準備をはじめとして国内反動支配の強化を本格的に展開したことである。このことは社会党＝社民の没落がなによりも鮮明に示している。議会内左翼＝社会党は議会が支配者によつて不必要、いや、至告になつたときから社会的存在理由を失なうのである。かつ政府＝ブルジョアジーは政治的反対派に対しては治安問題化をもつて答えるのであり、現実の破防法、騒乱罪体制はこのことを如実にものがたつているのである。

才五には、だがしかし、これを打破し、プロレタリア革命へとつき進む部隊が限りなき前進を勝ちとつたことである。まさに才一回「建国記念の日」のおこなわれた一九六七年は十・八、一一・一二の羽田斗争によつて暮れ、翌六八年にはエンタープライズ寄港阻止斗争によつて明けたのである。最後的には十一月決戦へと集約された我が戦線の斗いは明確に革命の現実性をよびさまし、日本帝国主義打倒への展望を切り開いたのであつた。

以上のことは今年の「紀元節」をいまにないものとして実現するのである。対外膨張の巨大化と、だがしかしその動揺の激化、かつ国内における革命勢力の抬頭といつた事態は日本帝国主義をして国内における政治・経済・イデオロギー的反動の強化を促すからである。紀元節はいよいよその反動的牙をむいて襲いかかつてくるであろうし、我々の反撃も情勢のからみあわせとともにより根底的であらねばならないからである。

3　沖縄と紀元節

以上の確認の上で、「紀元節復活反対斗争」は「沖縄奪還斗争」との結合を語らないと現在的な意味性を喪失するのである。

ベトナム侵略戦争への参戦国化と朝鮮半島の危機化が日本帝国主義にとつての強制された対外政策的展開であるならば、このことを一方において保障するのが「紀元節復活」の様な非生産的対外侵行の合理化としての国内における「国家主義・排外主義イデオロギー」の鼓舞であるとともに、一方における軍事的要の強化拡大である。それは取りも直さず沖縄なのだ。全島基地化、永久核武装化のなされた沖縄こそが日帝のアジア進出にとつての軍事

要塞であり、かつまた矛盾の発現点なのでもある。さきにも語つた沖縄全軍労を先頭とする全県民の斗いは七十年代日本階級斗争の先がけであり、我々は百万県民と連帯し沖縄奪還斗争を斗うときさらなる決意に燃えるのである。燎原の火の如く燃えたつ沖縄の斗いは、日本帝国主義による政策的民族分断とこれによつて成り立つた沖縄の全島基地化＝住民生活の徹底的破壊を原点としているのであつて、我々はここに沖縄県民と共通の敵を「安保粉砕日帝打倒」の綱領的立場を獲得することによつて見つめ、沖縄百万県民、なかんずく高校生との連帯の下に一大斗争を行なわねばならないのである。共通の敵、日本帝国主義打倒に向け、「紀元節粉砕・沖縄全軍労連帯」全国高校生統一行動を我々は勝ちとらねばならない。すでに沖縄高校生の間では全軍労と連帯するシンポジユウムや集会をもちつつ本土高校生との連帯めざして二・一一全国高校生統一行動の準備が開始されている。全国四百五十万高校生の中に大担に「紀元節」と「沖縄」を持ちこみ、二月十一日には一斉決起を勝ちとろうではないか。　一月十三日

1. 天皇制ボナパルテイズム論

—日本近代国家論に関する覚書き(一)—

武井健人

（『批判と展望』二号）

「絶対主義天皇制」論の亡霊批判

—天皇制問題の理論的混乱—

ボナパルテイスト的君主制としての把握を

戦前の日本共産主義運動が直面した天皇制権力の階級的特質はいかなるものだつたのか——こうした問題の理論的解明は、すでに天皇制が統治形態の後景にしりぞいてしまつた今日では、革命論争の中ではもはや才二義的な意味しかもちえない。

天皇制は、敗戦直後の革命的激動と日共の裏切りの中で、ブルジョアジーによつて現実に解決されてしまつた。今日では、天皇制は国家の正面にしみついた紋章にまで、去勢されている。

だが、こうした現実は、われわれ革命的マルクス主義者が天皇制問題から立ち去ることを許すだろうか。われわれは、労働者や学生のマルクス主義サークルの中で天皇制に関する種々の質問によく遇うのである。

それは、おおよそ、つぎのような事情による。

才一には、社会革命への志向は一般に、現存する国家がいかなるものであり、いかにして形成されたのか、という関心を広範につくりだすこと。そしてわが国ではつい先日まで天皇制という「例外的国家」が存在していたこと。

才二には、天皇制問題は、日本共産主義運動の挫折と敗北の基本的回転軸の一つをなしていたこと。したがつて、日共に対する批判が歴史的過去にむかつてすすむならば、必然的にこの核心に接近せざるをえないこと。

才三には、にもかかわらず、こうした検討におもむこうとしている人の前には、さまざまな色合をもつた「天皇制」論が破廉恥にも自じろおしに並んでいること。しかも、既成の一切の「天皇制」に関する諸理論は、労農派も含めて戦後の「民主革命」の中で破産したにもかかわらず、いぜんとして革命運動の体内に深く亡霊のようにしがみついていること。

才四には、われわれ革命的マルクス主義者にとつて、こうした理論亡霊を全面的に退治することが全く必要であるにもかかわらず、そうした仕事は、ほとんどといつていいくらい行なわれていないこと。

こうした右の事情は、われわれに極めて困難な、だが、まつたく分に合わない仕事を強制する。かつて、エンゲルスは『住宅問題』の序文の中で「ある程度までたちいつて近代社会主義を研究するものは、運動の『克服された見地』をもしらなければならな

いま」といつたが、わが天皇制に関して、ブルジョアジーの側ではすでに「克服された見地」に到着しているのに反して、プロレタリアートの側ではいまだに「克服された見地」が与えられていない。

本紙八一六号（早稲田大学新聞）に載つた宍戸恭一『現代進歩的文化人論』（上）は、「日共公認の史観を打破するために最初に着手すべき作業」として「その才一は、戦前の日本共産主義運動が対決すべき国家権力の性格は、『天皇制ファシズム』ではなくて、『絶対主義天皇制』であるということの確認である。」といつている。つまり宍戸恭一は、「日共公認の史観」である志賀説＝天皇制ファシズム論を「打破」するために、神山説＝絶対主義天皇制論を対置しようとする。

だが、こうした「作業」によつて、はたして「日共公認の史観」は「打破」されるだろうか。

たしかに、神山茂夫の「二重の帝国主義」＝「絶対主義天皇制」論は、「日共公認の史観」ではなかつた。往年の志賀・神山論争では、神山説は、日共内の官僚主義的統制によつて、理論外的に封殺された。こうした処置は、後年の『神山問題』へと結びつく不吉な兆候でもあつた。

事実、スタリーン＝ブハーリン的な二段階戦略に立脚しつつ、いわゆる三二年テーゼに依拠して展開された神山の「天皇制ファシズム」論批判は、それなりに首尾一貫した理論でもつて、志賀理論と三二年テーゼの間に存在する対立と空隙を拡大してみせてくれた。こうした神山とその一派の精力的な理論活動は、それ自身としては極めて戯画的な謬論ではあるが、にもかかわらず、志賀理論の不確定戦略的な本質とそのファシズム論の現象論的な特質を暴露するという意味では、それなりの有効性をもちえた。

天皇制ファシズム論の原典ともいうべき志賀の「明治以来、天皇制が強大な独立性をもつ国家権力としてつづき、一九三一―四四年のあいだに"絶対主義的な天皇制が"帝国主義権力として、そのままファシスト的役割をやらされることになつた云々」（『軍事的・封建的帝国主義について』）という所説が、いかに他愛のない現象論であるか、われわれは、ここではこれ以上に追求せずに、半封建的権力としての絶対主義と近代的権力としてのファシズムとの質的差異を、神山とともに、指摘するにとどめよう。

だが、今日、「日共公認の史観を打破」すると称して、神山のかつてのこうした見地が蹠をはらつて復活しようという事実に直面して、われわれはいささか感ずることもなくはない。

考えてみると、八月十五日まで日本に絶対主義が存在したという見解は、いくらか理論癖をもつた「マルクス主義」者の間ではかなりの支持者を発見することができる。中西功や佐藤昇や柴田高好のようなスターリン主義者の中ではそれなりの理論的水準をもつた人たちが、今日でもいぜんとして、敗戦当時の天皇制を絶対主義と規定しているのを知つて、われわれは、天皇制問題の理論的混乱について、いまさらながら、りつ然とする。

しかし、こうした混乱は、ただたんにスターリン主義者の間にとどまらず、吉本隆明というような人でさえ、天皇制を「地主＝官僚制」と考え、神山の『天皇制に関する理論的諸問題』における分析を「わたしの知つているかぎりでは、もつとも正確な日本ファシズムへの理解である」などといつている始末である。（吉本『日本ファシストの原型』）

だが、これらの人たちが、天皇制を絶対主義と規定しようとする原因には、それなりの現実的基礎と心情的状況がなくはない。たとえば、吉本は共産主義者同盟の綱領草案が「戦前・戦争期・戦後を直線的なアスファルト路で切開している」のに対して「わたしなどがいだいている太平洋戦争期から戦後期にかけての社会的ヴィジョンはこれとすこしちがつている」とのべ、「太平洋戦争期は、三二テーゼが規定する権力構成がしだいに構造をかえていつた過程であり、敗戦、占領は、ブルジョア的な変革がしだいに完成する過程である。」といつている（吉本『戦後世代の政治思想』）。この論文には、政治的概念の混乱、とりわけ三二年テーゼの桎梏が色こく刻印されている。にもかゝわらず、政治的概念上の混乱を捨象して、この所説に想像力を与えるならば、吉本が戦後の日本社会＝国家の変化にもつと深刻な政治的＝思想的意義を求めようとして苦吟しているのだ、と容易に気付くだろう。

つまり、今日、われわれが、戦後日本革命の敗北の原因を解明しその克服の道を照しだそうとするとき、戦後のこうした変化をどう考えるか。そして、こうした変化に対して日共や労農派マルキストがいかなる役割をはたしたのかについて解明することは、まつたく不可避である。われわれは、吉本とはかなり相違した意味ではあるが「戦前・戦争期・戦後を直線なアスファルト路で切開」しようとする共産主義者同盟の「公認の理論」とは、まつたく別の方法をとろうとしている。

われわれは、むしろ、戦前の天皇制とブルジョアジーの関係を鋭角的に再構成し、絶対主義でもファシズムでもない、別のブルジョアジーの「例外的国家」としてのボナパルテイズム的君主制として天皇制を把え、戦後の変化を、こうした天皇制ボナパルテイズムから議会民主制への解体→再編の過程として理解しようとする。こうしたわれわれの見解は、八月末に発行した『安保闘争―その政治的総括』（現代思潮社版）の中で、日共批判に関連してごく簡単な定式に素描しておいた（一六六頁―一六七頁）が、ここでもうすこし詳細にその理論的根拠ならびに現実的基礎について明らかにしたいと思う。

周知のように、イギリスで発達した資本主義の世界的過程の中に、日本が直接に投入されるようになつたのは、十九世紀も後半に入つてからであつた。明治維新で成立した近代的統一国家―すなわち、中央集権的な絶対君主制―は、それ自身としては封建的家臣団が軍事的警察的官僚制に転化することによつて形成された極めて絶対主義的な国家であつたにもかかわらず、欧米の列強と対抗していくためには、みずからの基礎である封建的な大土地所有制を解体し、資本主義的発展の道を掃ききよめなくてはならなかつた。エンゲルスがロシアについて「もしもロシアがクリミヤ戦争の後、自分自身の大工業を必要としたならばロシアはそれを一つの形態、すなわち資本家的形態においてのみ、得ることが出来たということは確かです。従つてロシアは、資本家的な大工業がその他一切の国々でもたらすところのすべての結果を受け取らねばならなかつたのです」（『マルクス・エンゲルス選集』一三巻）といつた事情が、日本でも同様に起つた。

明治初年の一連の農村改革は、封建的大土地所有制から近代的土地所有への過渡的形態としての過小農制を普遍的に生みだした。しかしながら、重要産業から集中的に外国の高水準の機械と技術を導入して展開された日本資本主義は一方では有機的構成の極めて高度な産業を形成していくと同時に、他方では極めて構成の低度な産業をとりのこし、超近代的な重工業と前近代的な家内工業が共存する奇妙な二重構造を形成する。そしてまた、こうした日本資本主義発展の特殊制は、農村から都市への労働力の流出をいちじるしく困難なものにし、没落し土地を手放した農民がふたたび猫の額のような土地を借りて耕作することによつて、かろうじて生計をたてるという状況を普遍化した。こうした過小農制の上に高利貸的な―すなわち、商品生産者としての小作農に帰すべき普通利潤のすべてを横奪し、普通労働報酬のかなりの部分すら横奪する―寄生地主制が成立する。だが、こうした過小農制を基礎とする高利貸的地主制は山田盛太郎がいうように日本資本主義の「半隷農的特質」を決定する「基底」ではなくして逆に日本資本主義の特殊性と土地の私的所有が条件づけるのである。

こうして、わが日本資本主義は近代文明にとりのこされた「野

強み」たる過小農と零細工業者のかなり巨大な層を社会の隅においやりながら、しだいに日本社会の基本的な社会構成として勝利していく。明治二二年に開設され帝国議会における皇室歳費の審議権をめぐる政府党と民党との闘争は、前記の資本式絶対的発展に基礎をもつ民党と貴族との矛盾の一つの幻想的形態であつた。半封建的な土地貴族とブルジョアジーの均衡の上に成立した絶対主義天皇制は、明治二九年の選挙、すくなくとも、明治三一年の憲板内閣の成立以後その解体―ブルジョア的変質の過程に席をゆずる。

だが明治二九年には労働立法が問題になり、翌三〇年には足尾銅山事件が起き、労働組合期成会が組織され、小作人組合結成の動きがはじまつた。日本のブルジョアジーは、あまりにもおそくやつてきたために、ヨーロッパでは、すでにブルジョアジーが政治的に没落しはじめた後に、その政治的最盛期をむかえようとしていた。ブルジョアジーが、かれらの工業、商業、交通手段を発展させればさせるほど、かれらはそれに比例してプロレタリアートを生みだす。そして、ある点にくると――これは、かならずしもあらゆる所で同時にもしくはおなじ発展段階においてあらわれることを要しないが――かれらは、かれらの分身であるプロレタリアートがかれらを追いこして成長しはじめるのに気付く。この瞬間から、ブルジョアジーは、独占的な政治支配への力を失う。ブルジョアジーは、ただ自分のかわいい皮膚を守りたいばかりにかれらの昨日までの敵、一切の反動的な勢力を同盟者として発見する。

エンゲルスは、『ドイツ農民戦争』第三版の序文の中で、つぎのようにいつている。

「産業の急激な発展は、ユンカーとブルジョアとの闘争をしてブルジョアと労働者との闘争に席をゆずらせ、そのため、旧国家の社会的基礎は内部においても完全な変革を経験したのである。一八四〇年代以来次々に変質しつつある君主制は、貴族とブルジョアジーとの闘争を基礎条件とし、そこに平衡をたもつていた。もはや、ブルジョアジーの進出に対して貴族をまもることではなく労働者階級の進出にたいしてすべての所有者階級をまもることが問題になつた瞬間から、旧絶対君主制は、とくにこの目的のためにつくりだされた国家形態たるボナパルト君主制に完全に移行しなければならなかつた。」

われわれは、日本でもほぼ同様の過程が明治二九年―三一年頃から始まり、大正二年の護憲運動おそくとも、大正七年の原政友会内閣の成立の頃までには完了していたと考える。「大正デモクラシー」の名で呼ばれる外見的立憲君主制は、「ふるい絶対王制のこんにちの解消形態であるとともにボナパルト的王制の存在形態」（エンゲルス「住宅問題」）であつた。

こうした新しい政治的変化の中で、支配的ブロック内部でのブルジョアジーの地位は、ますます拡大され、貴族および地主とブルジョアジーの同盟を維持しうるものはただ、大正六年以来「急撃にその数をまし、またその階級意識をいちじるしくつよめたプロレタリアートにたいする恐怖にほかならな」かつた。

そして、このような日本ブルジョアジーの旧社会との闘争の不徹底さは、天皇ボナパルテイズムのもとに、高度に発達した資本主義社会のいたるところにドロドロとした前近代的汚物をぬりたてることを可能にする。

こうした前近代的汚物は、なによりもまず、農村における過小農制と都市における家内工業制の広範な存在に物質的な基礎をもつている。しかも、これらは、すでに悪臭を放ちはじめるまでに成熟した独占資本主義と対応することによつて、経済的貧困と文化的退廃をより一層深める。こうした状況は、ただ、独占資本主義にまで発展した資本主義的諸関係と土地の私的所有を根本的に変革しない以上、けつして止揚されえないであろう。

したがつて、こうした見地に立ちえない小ブルジョアとそのイデオローグは、一方では、小農民の救済をブルジョアジーとプロレタリアートの階級的対立を「超越」した国家的意志の強力な実現にもとめ他方では「ブルジョアなきブルジョア革命」を高度の独占資本に手をつけずに実現しようとする幻想にとりつかれる。

いまや、ロシア革命の遠雷によつて、自己のプロレタリア的任務を自覚した若き革命家たちは、世界にもツアー以外にも類例もないような狂暴な国家権力にたちむかつていかなくてはならなかつた。だが吉野作造や大山郁夫といつた急進デモクラットのもとで左傾化した革命的インテリゲンチャの多くは、国家の直接的な狂暴性から天皇制を絶対主義として把握する現象論におちいり、しかもこうしたあやまりはスターリン的ブハーリン的な二段階戦略と結合することによつて、日々激化するブルジョアジーとプロレタリアートの闘争と別個に「天皇制打倒」を掲げるという反動的役割すらはたすのである。

こうした小ブル急進主義的傾向は、革命的プロレタリアートの現実的闘争の発展、昭和二年の金融恐慌・同四年の世界恐慌による階級闘争の激化によつて、しばしばプロレタリア革命の側への傾斜を示しながらも、プロレタリア革命論と二段階革命論の間を動揺し、ついには、志賀の「悪名たかき」不確定戦略に結晶する。

したがつて、こうした志賀不確定戦略の産物としての天皇制ファシズムに対して、ただ絶対主義規定を対置することは、混乱の原典の方が破綻がすくないというだけのことで、いまさら問題にもならない。ところで、戦後華々しく展開された志賀・神山論争が、実際には戦後日本革命にとつていかに無意味なものであつたか、労農派マルキストの言行ともあわせて次に検討することにする。

戦後「民主革命」の幻想

32年テーゼ再生による裏切り

ブルジョア的議会民主制の確立

マルクスは、一九五八年四月十六日付のエンゲルス宛ての手紙の中で「ドイツにおける全事態は、農民戦争の第二版のようなものによつてプロレタリア革命を助くべき可能性に依存するだろう。そうすれば、事件はすぐれたものとなるのだ。」と語つている。プロレタリアートと農民の同盟の問題を提起したものとして有名なこの一節は、戦後の日本革命運動の挫折について検討する場合極めて貴重な視角をわれわれに与えてくれる。

なぜならば、戦後のいわゆる農地改革に直面して、当時の一切の「マルクス主義」理論家と一切のプロレタリア「指導部」は、共通して、こうしたマルクス的見地に立つことができず、天皇制ボナパルテイズムの崩壊→ブルジョア的議会民主制の確立の過程を「民主革命」あるいは「民主的改革」として肯定的に把え、その不徹底性を論難するばかりであつたからである。

かくして、かれらは「農民戦争の第二版のようなものによつてプロレタリア革命を助くべき可能性」を、ブルジョアジーの思惑どうりに自己の手で放棄してしまつた。日本ブルジョアジーは、自己の旧来の政治的同盟者である地主を見すて、高利貸的地主制のもとで生産力の発展を阻止されてきた借地過小農民を自作小農民に変えることによつて、このぼう大な小ブルジョアを自己の新たな同盟者に獲得したのであつた。そして、わが「マルクス主義」者たちは、ごていねいにも、このブルジョア的過程にいろいろな

マルクス主義的な説明（7）を与えることによつて、こうした変化を美化し、労働者階級をブルジョアジーの末尾に結びつけたのであつた。

神山はいう――「日本の政治的・思想的流派の中、昔も今も一貫して戦争と反動の元凶である天皇制の廃止を主張しつづけた党派は三十年の歴史をもつ日本共産党だけである。従つて、終戦前においては、戦略的打倒の目標であつた天皇制に対する態度決定すなわち、戦略問題をめぐつてこそ、共産党およびその支持者の隊列のなかに離合集散がおこなわれた。……党正統派は、平和・米・土地・自由のための闘争を集約する戦略的闘争目標として、絶対主義的天皇制の打倒を一貫して主張した。これに対して、この時代における敗北主義者と妥協主義者はすべて『天皇制万才』を叫んだ。また、いわゆる『良心的転向者』は、日本の支配権力は、絶対主義にはなく、金融独占資本あるいはファシストの手中にある、と主張することで、天皇制権力への自己の降伏を合理化していたのである』と。（神山『天皇制に関する理論的諸問題』葦会版への序文―五三年）

つまり、神山によれば、「日共公認の史観」は「絶対主義的天皇制の打倒」を戦略的目標とすることにあつた、というのである。したがつて、宮戸の「日共公認の史観を打破する才一の作業が戦前の日本共産主義運動が対決すべき国家権力の性格は、『天皇制ファシズム』ではなくて、『絶対主義天皇制』であるということの確認である」との主張がいかに戯画的であるか、いうまでもないであろう。

だが、前回で指摘したとおり、こうした主張には、それなりの心情的な基礎がなくもないのである。すなわち、戦前の革命家たちの革命的心情の一つの転回軸が、おおかれすくなかれ、天皇制的な支配体制への憎悪につながつていたことであり、また、革命的陣列からかれらが離脱していく場合、その多くは、天皇制への屈服という形をとつてあらわれたということである。

天皇制的支配体制への憎悪

例えば、大逆事件で天皇制の絞首台に上つた明治の革命家＝幸徳秋水は、『兆民先生』（明治三五年発行）の中で、つぎのようにいつている。

「暘暘巴里城中の平民、一たび竿を掲げて叫ぶや、欧州列国の王侯宰相為めに震惶せるは何ぞや。他なし、民権は至理なれば也、自由平等は大義なれば也。憐れむ可し、東洋の小帝国、曾て此至理の彩華を現ずるなく、曾て此大義の甘雨に浴するなし。コウコウ（翰々）然として専制の頑夢未だ覚めず、蠢々乎として猶ほ蛮野の城中に在り。……（兆民）先生の仏国に在るや、深く民主共和の主義を崇奉し、階級を忌むこと蛇蝎の如く、誓つて之を刈除して以て斯民の権利を保全せんと期せるや論なし。且つ請らく、凡そ民権は他人の為めに賜与せられるべき者に非ず、自ら進んで之を恢復すべきのみ。彼の王侯貴族の恩賜に出る者は、亦其剣奪せらるる有るを知らざる可らず。古今東西、一たび鮮血を濺がずして、能く真個の民権を確保し得たる者ある乎。吾人は宜しく自己の力を揮て、専制政府を顚覆し正義自由なる制度を建設すべきのみと」

秋水が中江兆民を『革命の皷吹者』として称揚し、パリ・コンミューンに感動し、専制政府の顚覆に熱中する兆民を語るとき、秋水もまた、ひそかに天皇制の打倒の日を想いうかべていたのであろう。

二段階革命戦略の登場

そして、こうした専制政府＝天皇制にたいする革命的憎悪は、

その後も、すべての革命家たちに継承されていつたのである。

だが、問題は、いまや、つぎの点にかかわる。――すなわち、日清戦争以後、激化していくブルジョアジーとプロレタリアートの闘争は、こうした専制政府＝天皇制との闘争にいかなる新しい意味を与えるか、という点に。

こゝにおいて、日共正統派は、こうしたブルジョアジーとプロレタリアートの均衡がもたらした天皇制のブルジョア的変質をみおとし、スターリン・ブハーリン的な二段階革命戦略にもとつき天皇制打倒をめざすブルジョア民主主義を主張し、そしてまた、日共から分離した労農派は、二段階革命論を否定し、正しくも帝国主義ブルジョアジーの打倒をめざすプロレタリア社会主義革命を主張しつつも、天皇制をただ「封建的遺制」として把え、日本国家権力構造の特質を正確に規定しえなかつたのである。

かくして、ブルジョア＝地主という階級的実体と天皇制権力の分離は、すくいがたい混乱を戦前の革命運動に与えるのである。そして、こうした混乱は、つぎのような事情によつて、さらに拡大されるのである。

すなわち、「ふるき絶対君主制の根本条件、すなわち、土地貴族とブルジョアジーとの均衡と相ならんで、近代的ボナパルティズムの根本条件、すなわち、ブルジョアジーとプロレタリアートとの均衡を発見する」（エンゲルス『住宅問題』）ような状況の中で、「労働者階級の進出にたいしてすべての所有者階級をまもる」ために、天皇制ボナパルティズムという形態で自己の政治的権力を実現した日本ブルジョアジーは、一方では、大正六年以来「急激にその数をまし、またその階級意識をいちじるしくつよめたプロレタリアートに対する恐怖」から、土地貴族との同盟を強めつつも、他方では、重化学工業の急激な発展を基軸に日本資本主義の高度化をすすめつつ、「自作農創定維持補助規則」（大正十五年）の制定を起点に農村のブルジョア的改革に着手したのである。「もつとも穏健なる形式で、かつ『つねに漸進的』という気持ちのよいメロデーとともに……」

独占ブルジョアジーのこうした農村政策は、戦時経済によつて促進された銀行と重化学工業の集中・独占、国家資本との融合、三井財閥の池田成彬の改革に表現される旧財閥の再編、国家独占資本主義への発展、という新しい過程のなかで、より急進に進んでいつた。農地調整法（昭和十三年）、小作料統制令（昭和十四年）、米穀管理規制（昭和十五年）等の一連の日本農業への国家独占資本主義的統制は、小作料の金納化を不可避とし、さらに、臨時農地等管理令（昭和十六年）、作付統制規則（同）、農業生産統制令（同）、食料管理令（昭和十七年）、農業団体法（昭和十八年）等による全面的な農業統制の確立は、地主の解体を深刻化したのである。そして徴兵の拡大による農業労働力の絶対的相対的な縮少は、高利貸的地主制の成立を根拠づけていた一つの条件である土地飢餓を解消してしまつたのである。

こうした一連の農業政策は、地主層の没落を急激に促進し、同時に、政治的支配層内部における土地貴族の政治的比重をいちじるしく縮小せしめた。だが、この事実から直接に土地貴族の政治的没落→支配層のブルジョア的均質化を結論づけることは誤りである。日本支配階級の極度の反動性を決定づけていたころした要素が、完全に一掃されたのは、戦後である。そして、ころした『ファシズム』論者の素朴な反映論は、天皇制絶対主義論をして召喚派を批判したレーニンの「かかる誤謬――専制政治と君主制との忘却、これを直接に上層階級（ブルジョアジー）の『純粋』の支配に帰せしむること」という断片にしがみつかせ、一応の説得性を与えることになるのである。

日本帝国主義者の軍事的敗北、それによる軍の自己崩壊、官僚制度の停滞、そして、敗戦前から深刻化していた生産の低化、等等の日本資本主義の危機は、戦前、急激なテンポで高揚を示した

労働者階級の闘争と対応することによつて、前革命的情勢をつくりだした。天皇制ボナパルテイズムの「独立性」の実体を構成してきた軍隊の崩壊、警察・官僚制度の解体、地主＝土地貴族の実質的没落、そして都市におけるプロレタリアートの革命的高揚と農村における農民的動揺、これら一連の政治激動は、一挙に、ブルジョアジーの統治形態である天皇制ボナパルテイズムを崩壊せしめた。

いまや、革命的プロレタリアートにとつて、ブルジョアジーのあれやこれやの統治形態が問題ではなくして、こうしたブルジョア的支配の打倒が現実的課題として登場したのである。敗戦によるブルジョア的秩序の混乱は、「内乱」に転化されねばならなかつた。

だが、公然として活動の自由を獲得した日共は、『人民に訴う』との才一声明の中で、絶対主義天皇制打倒を強調し、三二年テーゼに忠実に民主主義革命の完成を呼びかけたのであつた。日本ブルジョアジーがすでにふるき統治形態である天皇制ボナパルテイズムの崩壊を確認し、新たな統治形態を模索しているとき、わが労働者「前衛党」は、かれらにかわつて、ブルジョア民主主義の実現を追求し、地主制の一掃による小農の普遍的成立を綱領的課題としてたたかつたのである。

戦時中の天皇制権力の規定をめぐる志賀・神山論争は、こうした「民主革命」の幻想のうえに、華やかなジャーナリズムの脚光をあびながら進行した。だが、ここには、レーニン論文の断片をめぐる訓古学者的な探求はあつても、労働者階級の現実的闘争が提起する諸課題との生々とした交流は片鱗すらみいだすことができないのである。まことに、「革命的プロレタリアートにとつて自由主義化したブルジョア・インテリゲンチャの悲しむべき各種の偏見をさけて通ることはできない」（神山前掲書）のである。

だが、戦前、資本主義論争の中で、二段階革命戦略に反対し、「和製トロツキスト」（内田穣吉『日本資本主義論争・歴史編』）と銘印された労農派もまた、こうした事情を根本的に変更させるものではなかつた。

左翼社会民主主義者の転身

労農派の「闘将」であるといわれる向坂逸郎はいう――「私は日本の敗戦をもつて終つた才一次世界大戦後の世界の政治経済の動向と日本の新たな社会情勢とは、おそらく日本におけるプロレタリアートの戦略と戦術とを根本的に変化させるのではないかと考えていた。…新たに生じた日本の国際的地位は、日本プロレタリアートの主要なる当面の階級的任務を、民主主義革命の完成におくほかなからしめている。そしてこのことに日本国民が成功するか否かは、社会主義社会への進展がいわゆる平和的なみちを通つて最少の摩擦をもつて遂行されるかどうかを決定する。……すなわち、日本における社会情勢の変化は社会変革を一段的というより、なしろ二段的というのをより適切としているかのようである」と。

つまり、向坂によれば、戦後の国際情勢の変化は、日本プロレタリアートに民主主義革命の完成という「主要なる当面の階級的任務」を与えたというのである。こうした向坂の見地は、山川均の『民主革命論』の「民主的権利の拡大」との表現と対応させて考えるならば、労農派の主要な見解であるといえるであろう。

わが「社会主義革命」論者は、プロレタリア革命の前夜に直面して、いまや「民主主義革命の完成」という一段階を間にはさむことによつて、こうした前革命的情勢を流産させ、ブルジョアジーが自己の政治的経済的体制を確立するための時期を与え、こうした過程を「左翼」的に美化する役割をはたしたのである。

小ブルジョア左派の役割

かくして、わがブルジョアジーは、スターリン主義者と左翼社会民主主義者の裏切りによつて援助されることによつて、敗戦による革命的危機を乗りきり、アメリカ占領軍の「強力」によつて社会秩序の混乱に対処しつつ、農地改革を遂行し、警察・官僚制度を基本に「ブルジョア支配の首尾一貫した形成」（エンゲルスのベルンシュタインへの手紙・一八八三年）である民主的議会制へと移行するのである。こうした戦後の天皇制ボナパルテイズムから議会民主制への転換は、帝国主義ブルジョアジーにより安定した政治的階級関係をもたらした。

だが、こうした危機の回避は、ただ「小ブルジョア的」マルクス主義者の裏切りにより労働者階級の血みどろの敗退によつてのみ可能であつたのである。そして、戦後のこの「民主化」を「民主革命」としてしか把ええなかつた一切の「マルクス主義者」は、マルクスが、ドイツ革命における小ブルジョア左派の役割についてのべたつぎのことが、なんと似かよつていることか。

「民主主義小ブルジョアは、革命プロレタリアのために全社会を変革しようなどとは毛頭考えず、現在の社会をできるだけ自分らの我慢のできる、そして快適なものにするような、そうした程度の社会状態の変更をめざして努力する。したがつて、彼らはなによりもまず、官僚の縮小による国費の節減と、主要な租税を大地主とブルジョアに転嫁することを要求する。彼らはさらに、官設信用機関と高利収奪法――彼らや農民はこれによつて資本家からではなく、国家から有利な条件で借入れできるようになる――によつて小資本に対する大資本の圧迫を排除し、さらに、封建制度を完全に一掃することによつて農村におけるブルジョア的所有関係を貫徹させることを要求する。これらのすべての要求をつらぬくために、彼が必要とするものは、立憲的なものにせよ共和的なものにせよ、彼らとその盟友たる農民とを多数派にする民主的国家組織と、自治体財産および現在官僚によつて行使されている一連の機能にたいする直接の統制権を彼らの手にあたえる民主的な自治体制度とである」（マルクス『共産主義者同盟への中央委員会の回状』）

2 紀元節と日本帝国主義

武井健人

（六五・二・一五、二・二二革共同機関紙『前進』二二一・二二二号）

(一) 天皇制的圧制の象徴としての紀元節

六五年二月一一日、内山神奈川県知事は、県職労をはじめとする労働者人民の反対をふみにじつて、紀元節復活を公式の行事として強行した。佐藤内閣は、このような「下から」の動きと呼応して紀元節（建国記念日）復活の意向を公然と宣言し、今国会における強行採決を虎視眈々と狙つている。

佐藤内閣のこの紀元節復活の動向は、原潜寄港・日韓会談など一連の帝国主義的政治反動の一環であり、労働者人民の反戦反権力の背骨をたたき折り日本帝国主義の侵略と抑圧、搾取と収奪の政策への全面的降服を要求する超反動的な政治・思想攻撃である。われわれは、紀元節復活の動向の急激な緊張について、日本帝国主義の攻撃の質的転換を明確に示すものとして、その重大な政治的・思想的位置を評価せねばならない。まさに紀元節復活は、日帝の南朝鮮再侵略の政策としての日韓会談と表裏一体をなす国内政治反動である。

事態は重大であり、情勢は緊急である。だが、社会党、共産党などの既成指導部は、紀元節復活問題のもつ決定的な位置についてまつたく無感覚である。社会党は、議会における反対運動すら完全に放棄している。共産党は、『アカハタ』（二月七日）の日曜論壇という小さいコラムで的はずれな論評を加えただけで動こうとすらしない。現在のところ、紀元節復活にたいする反対の動きは、神奈川県職労など一部の関係労組と国民文化会議など若干の知識人のみに限られている。

戦後革命の敗北の副産物としての戦後民主主義にかんして、それを天与の条件か、せいぜい戦後民主革命の獲得物としてしか理解してこなかつた社会党、共産党の指導者たちは、日本帝国主義の発展の質的転換のなかで〈戦後民主主義と日本帝国主義の矛盾〉がいまや深刻な危機的段階を迎えはじめていることにすこしも気づいていないのだ。われわれは、春闘・原潜・日韓などの闘争に結合しながら独自に紀元節復活阻止のたたかいを強めるために奮闘するとともに、戦後民主主義と日本帝国主義の矛盾の激化のもつ意味を日本プロレタリア革命との関連において全面的に分析し、帝国主義的政治反動とのたたかいの綱領的基礎を明確にしていかねばならない。

紀元節は、戦前における天皇制的圧制の歴史的象徴であり、したがつて日本帝国主義の狂暴性と超反動性を示す政治的象徴であつた。

従来、イギリス、フランス、アメリカなどの先進帝国主義は、栄光革命、一七八九年のフランス大革命、独立戦争・南北戦争など旧勢力とのブルジョア民主主義革命を「国民統合」の国家的象

徴としており、ブルジョアジーの若き日の「人間解放」の情熱をもつて帝国主義の侵略と抑圧・搾取と収奪を美化し、隠蔽してきた。だが、ドイツ、ロシア、日本などの後進帝国主義が産業資本主義段階から帝国主義段階へと転化しはじめた時代に資本主義的発展の階段をのぼりはじめたのであり、したがつて、その資本主義的発展の初期から帝国主義的資本主義としての傾向を強くもつており、政治的にはブルジョア革命の課題をきわめて不徹底に追求しながら帝国主義段階と複合的に照応した統治形態を持つた。ドイツのビスマルク主義、二〇世紀ロシアのストルイピン主義、日本の天皇制ボナパルティズムは、このような複合的統治形態の典型である。

明治維新を起点に飛躍的に発展した日本資本主義と日本ブルジョア段階は、明治維新によつて成立した天皇制絶対主義との革命的闘争を不徹底かつ未完成の段階で放棄し、逆に天皇制絶対主義のもとで発展した膨大な官僚制・警察・軍隊とゆ着し、内部から変質させその狂暴な政治支配と強度の資本蓄積を保証した。したがつて、日本帝国主義は、イギリス、フランス、アメリカなどの帝国主義のようにブルジョア的出生証明書をもたず、徳川幕藩体制・天皇制絶対主義との質的変化を可能なかぎりあいまいにしながら成立した。天皇制絶対主義の周辺にまとわりついていた前近代的な非合理主義と神秘主義は、その誕生とともに狂暴な政治支配を必要とし大陸諸国への侵略戦争を成長の起点とし極点としてきた日本資本主義にとつての恰好のイデオロギー的補併であつた。

もともと、日本古代にたいする幕末の志士たちの憧憬は、その直接的基地を徳川幕藩体制（封建主義）にたいする下級武士、草莽（前期ブルジョア階級）、農民の不満と反抗、迫りくる欧米列強の圧迫にたいする国民的統一のイデオロギー的支柱の必要においていたのであり、断じてその逆ではない。本居宣長をはじめとする国学の発展は、徳川封建主義の公認のイデオロギーが朱子学的な儒教にあつたことと無縁でない。日本古代にたいする探究のなかには、明らかに紀記的な天皇制神話のゆがみの背後に近代思想の前提が準備されていたのであり、そこには萌芽的であれ、原始共産主義への憧憬すら示されていた。だが、明治維新と天皇制絶対主義の成立は、儒教的、仏教的な封建制イデオロギーにたいする国学的批判を紀記的な天皇制神話にすりかえ、神道的非合理主義の開花をもつて徳川封建制との闘争の不徹底さを糊塗したのであつた。そして、他方、日本ブルジョア階級は一切のブルジョア革命的幻想をはじめよりもたず、前期商業資本的な　欲さと非情さで資本蓄積の一本道をつつぱしつたのである。

明治四年の神武天皇祭の設定、明次五年の「建国の日」（紀元節）としての神武天皇即位の日の制定は、明治専制政府を「万世一系」という天皇制的神話でもつて絶対化しようとする反動的試みであつたが、東京市民をはじめ国民の多くは、天照大神を主柱とする伊勢信仰は認めても天皇の「万世一系」の神話は認めず、天皇を京都の小大名の成り上りぐらいにしか考えていなかつた。だが、紀元節を軸とする皇国史観の国家的強制と学校教育は、明治一〇年代の自由民権運動の敗北をとおして天皇制イデオロギーの定着をもたらした。

日本資本主義とブルジョア階級は、このような「前近代的」な天皇制イデオロギーとの正面からの衝突を避け、逆に帝国主義への強行転化のためのイデオロギー的テコとしてもつとも「現代的」に対応したものである。

したがつて、天皇制的圧制とその反動イデオロギーとの闘争は日本資本主義＝帝国主義との闘争の不可分の一環として、その核心的課題をなしていたのであり、日本古代などに関する学問的探究は、それ自体として天皇制権力のイデオロギー的根幹を動揺せしめる危険をつねに秘めていたのである。それゆえ、津田左右吉を一頂点とする日本古代にかんする学問的探究は、天皇制ボナ

ルティズムの有形無形の政治的圧迫をはねのけて紀記を典拠とする天皇制神話の虚偽的ベールをひきはがすという学問的に真に勇名を要するたたかいであつた。近代日本におけるデモクラシーと学問的合理主義の発展は、日本帝国主義との尖鋭な矛盾を生みだすことなしにはありえなかつた。

共産党の二段階戦略の誤謬は、日本帝国主義と天皇制権力との有機的・複合的な照合関係を認識しえず後者との闘争を前者との闘争と段階的に分離する反弁証法的な戦略にあつたのであり、一方、労農派の日本資本主義論の決定的弱点は、日本ブルジョア階級の政治支配が天皇制権力を複合的に媒介しているという明白な事実にたいする一貫した無視（日和見主義の原則性？）にあつた。紀元節復活という形態で日本帝国主義の政治反動がきわめて鮮明に再登場しようとしている今日、われわれは、戦前の日本帝国主義における紀元節問題の意義の政治的・理論的な解明のうえにたつて、さらに戦後日本帝国主義における紀元節復活の動向のもつ意味を具体的に検討していくことが必要である。

(二) 支支配階級はなぜいま紀元節を必要とするか

日本帝国主義の中国侵略戦争を導火線にして勃発した第二次世界大戦は、膨大な人命の損傷、そして巨大な富と文化の破壊の後に、日本帝国主義の敗北をもつて終結した。大陸侵略を発展の跳躍台とし、天皇制的統治形態を支配の安全装置としてきた日本帝国主義は、この敗戦の結果として植民地と海外権益の一切を喪失し、国内政治反動の牙城としての天皇制ボナパルティズム権力の崩壊という政治的危機を招いた。

敗戦直後の日本階級闘争は、明らかに前革命的情勢にあつた。ポツダム降伏は、人民的＝労仂者的反乱による戦争の終結という革命的路線にたいする反動的な予防的反革命であつた。天皇制の存続にかんする執拗な連合国側との折衝は、日本帝国主義の歴史的な政治支配体系の崩壊にたいする日本ブルジョア階級の根強い怨恨を示していた。だが、戦時総動員態勢の解体にともなう日本資本主義経済の混乱と疲弊、生産停止と食糧危機、失業と復員、インフレと闇市場――こうした未曾有の社会的危機のなかで、自然発生的に激発した生産管理闘争（都市）と土地解放闘争（農村）の高揚は、一瞬にして天皇制ボナパルティズムの支配機構をマヒさせ、ブルジョア階級の政治的同盟者としての地主階級を完全に無力化してしまつた。

問題はこのような都市と農村における自然発生的闘争にたいしてどのような革命戦略と組織戦術が与えられるべきか、という一点にあつた。だが、「戦争と天皇制に一貫して反対してきた」という一枚看板で登場した日本共産党は、アメリカ占領軍を解放軍と美化し、当面する革命の課題を「民主革命」と規定し、社会主義革命との間に万里の長城を築いた。

ブルジョア階級の生産停止と資材インフレにたいする労仂者階級の自然発生的な生産管理闘争は、あくまで、「資本家が責任をもつて生産を再開するまでの民主的強制手段」としての枠を超えてはならないとされた。

新憲法は、このような戦後の前革命的情勢を乗り切るために労仂者階級の綱領的敗北による階級情勢の中間的停滞をついて、アメリカ占領軍の強大な軍事力と生産力を唯一の支柱として提出された。

アメリカ帝国主義と日本ブルジョア階級は、伝統的地主階級の犠牲のうえに土地改革を遂行することによつて農民と労仂者階級との結合を切断し、ブルジョア政治史上まつたく類例をみない広範な政治的自由を約束することによつて労仂者階級と都市住民の革命的高揚を「ブルジョア民主革命」の規範のうちに封じこめようとした。新憲法に反映している極大な政治的自由は、アメリカ

占領軍によつて「与えられた」ものではなくして、逆に、戦後の革命的情勢において現実に力でもぎとつた権利と自由をただ承認したものにすぎないのである。だからこそポツダム政令というかたちで提示されたアメリカ占領軍の政治的強制は一貫して日本プロレタリア運動の前進を阻止し、その政治的権利を奪う方向に作用したのである。

戦後におけるこのような革命と反革命の力学は、天皇制イデオロギーをめぐる全国民的闘争としてより深い陰影をもつて反映している。

四五年八月一五日の「玉音」放送から四六年一月の「人間天皇」宣言、そして同年一一月三日の憲法発布による「国民統合の象徴としての天皇」という結着にいたる過程のなかで、天皇制にかんするイデオロギー的状況は激しく揺れ動いた。この間、四五年一二月二五日の大正天皇祭をはじめ四六年二月一一日の紀元節は、天皇一家の行事となり、このような神道的祭祀と国家との分離が進行した。すでに軍隊はなくそのうえ弱体化した警察、官僚機構のうえに裸で政権につかねばならなかつた日本ブルジョア階級は天皇制ボナパルティズムの現実の崩壊のうえにたつて、天皇の政治的権限をほぼ儀礼的なものほまで制限し、人間天皇としての側面を強調することによつて天皇制的圧制にたいする批判を弱め、逆に、国民の間に存在する皇室への宗教的畏敬を徹底的に動員して資本制権力と私有財産の防衛の最後の政治的支柱とした。

当時労仂者階級の内部には、生産管理闘争から二・一ストへいたる階級闘争の現実的発展のもたらしたイデオロギー的変動と、数十年にわたる天皇制教育の累積したイデオロギー的複合との間に深刻な政治的・思想的亀裂が生じていた。日本共産党は日本帝国主義と天皇制的圧制、日本ブルジョア階級と天皇制ボナパルティズム権力との有機的・複合的な関係を総体として暴露し、そのうえに立つて労仂者権力の展望をうちだしていくという革命的立場にたちえず、天皇制打倒をただただ宣伝するという愚劣な戦術を強行することによつて、天皇制イデオロギーの重層的な壁に直角に衝突し敗北した。社会党と労農派は、このような政治的・思想的亀裂のうえでブルジョア権力と「民主革命」の間を右往左往しただけである。

かくしてアメリカ占領軍を強権的支柱とし、徹底した議会民主主義と比類なき広範な政治的自由の「約束」のうえで素裸で権力の座を確保した日本ブルジョア階級はブルジョア経済の復興と発展のためにありとあらゆる方策をうちだすとともに、ポツダム政令をタテに「与えすぎた自由」をとりかえし、支配機構をたてなおすために全力を傾注した。反動が始まつた四九年―五〇年のレッド・パージと六・六追放は、三五議席に有頂点の日本共産党を叩きのめし、労仂者階級の組織的権利をずたずたにした。だが、このような「逆コース」は、五二年の講和発効後カベに直面した。日本帝国主義は労仂者階級への弾圧の法的根拠を主として占領軍政策に依拠していたため、講和発効すなわち、軍事占領状態から条約的関係への転換によつてかえつて帝国主義的政治支配のための法制的基礎に空隙を生みだしてしまつた。そして、このような政治的・法制的空隙は総評を「ニワトリからアヒル」に変化させつつあつた日本労仂者階級にきわめて有利な政治的条件をもたらした。

五二年の破防法制定から六一年の政暴法流産にいたる約一〇年の政治過程は、このような空隙を埋めようとする帝国主義的政治攻勢と、それを阻止し「新憲法」的政治権利を防衛しようとする労仂者的＝大衆的政治闘争の攻防の歴史であつた。五〇年の朝鮮戦争ブーム以来の日本資本主義経済の上昇発展と五三年以来の東西「世界」の平和共存的発展を客観的条件とするこの攻防戦は、日本帝国主義の復興、発展にともなう資本の社会的強大化を傾向的にうみだしながらも多くの場合、ブルジョア権力の迂回によつ

て最後まで進展しなかった。五九年―六〇年の安保闘争は、国際条約の改定という一方的変更の困難な政治課題のために、対決を極限までおしあげることによつて、戦後日本帝国主義と戦後日本民主主義の総体のもつ危機的本質を赤裸々にした。

日韓会談を跳躍台とする日本帝国主義の東南アジア再侵略の開始日本資本主義経済の構造的危機の深化、そして現代世界の構造的変動の激化――こうした国際的・国内的条件の発展は、日本帝国主義の政治攻撃の質的転換を不可欠としている。日本帝国主義の発展の質的転換は、日本労仂者階級と人民大衆の内部に根深く存在している反戦・反権力の契機との矛盾を深化し、戦後民主主義の存立条件をますます尖鋭なものにしている。「平和と民主主義を守れ！」と叫ぶことは容易である。だが、帝国主義の発展と無関係に「平和」や「民主主義」が存在しうると考えている社会党・共産党指導部のカウツキー的理論では肝心の平和と民主主義を守りえないところまで事態はすすんでいるのだ。

紀元節復活の動向は、朝鮮再侵略の政策としての日韓会談と表裏一体の国内政治反動の一環である。だが、国民をイデオロギー的に統合する象徴としてこのような低劣な神道的祭祀しかかつぎだしえないということは、日本帝国主義の政治構造の脆弱性を明示している。戦後民主主義をめぐる激しい階級闘争をゆりかごにして成長した日本労仂者階級の若い世代はこのような政治反動を許さないばかりか、政治反動を必然化する日本帝国主義にたいする階級的姿勢をますます強めるであろう。

安保闘争を分水嶺とする戦後階級闘争の苦しみにみちた壁をつき破り、日本革命運動の階級的転換をきりひらこうとする〈第三の革命的潮流〉は、四・一七から原潜・日韓のたたかいのなかでいたるところで登場しはじめている。

われわれは、帝国主義的政治反動の急激な発展を明確に直視するとともに、紀元節復活というかたちで露呈した日本帝国主義の構造的脆弱性を世界史的意義でとらえ日本革命の基本的動向を全階級のまえに明らかにしていかねばならない。日本的非合理主義の死は、日本帝国主義の死を準備するたたかいとともにはじまるのだ。

3 紀元節復活と日本帝国主義の危機

―政治反動の開始を宣言―

武井健人

（六七・二・六『前進』三二〇号）

一九六七年二月十一日―この日を期して日本帝国主義の反動的攻勢行動としての紀元節の復活が強行される。

一昨年十二月、労仂者人民の抗議のこえをふみにじつて日韓条約の批准を強行じ、朝鮮再侵略の道をあゆみはじめた日本帝国主義は、アメリカ帝国主義のベトナム侵略戦争への恥ずべき加担を強め、労仂者人民への大衆収奪と労仂強化の攻撃を押しすすめるとともに、いままた「紀元節」復活を強行することによつて政治反動の公然たる開始を宣言した。

日米の体制的危機かけた攻撃

紀元節復活にあたつてまず第一に確認しなければならない点は、この復活がまずもつて「期待される人間像」に示される教育の国家主義化と相互補完関係をもつて反動的イデオロギー攻撃の国家制度的支柱の確立を意味している、ということである。

日韓条約、日本が敗戦帝国主義から侵略帝国主義に転化した政治的画期を示すものであるが、同時にそれは、戦後民主主義動揺に本格的な政治反動攻撃の開始を根底的に衝撃づけるものである。

六二年の経済危機の深刻化は、(1)資本の集中・合併・整理と、それにもとづく合理化、労仂条件の改悪、(2)独占救済のための公債経済への移行と、それにもとづく物価上昇と大衆収奪、(3)対米輸出と東南アジア進出を両側面とする海外膨張の本格的開始を必化したが、当然、このような諸攻撃の展開は、国内における労仂者支配体制の反動的攻撃と結びつかざるをえない。

戦后日本帝国主義の構造的脆弱性は、いうまでもなく、独自の勢力圏の完全な喪失と、それと対応した軍事的・政治的体制の未徹底性にあるといえよう。朝鮮戦争以来の政治反動攻撃、とりわけ安保敗北以来の階級の関係のブルジョア的傾斜のなかで、支配階級の攻撃は一段と強められているにもかゝわらず、軍事的・政治的体制の制度的改悪という側面では、いぜんとして構造的脆弱性を克服しえていない。

このような事情は、歴史的には第二次世界大戦における日本帝国主義の軍事的敗北と、国際帝国主義の戦后の延命・発展を前提としたものであるが、それは同時に、戦后日本階級闘争の具体的展開によつても政治的に規制されているものである。したがつて、観念的に設定された戦后世界民主主義体制なるものの直接的展開として戦后日本の政治体制を規定することは無用な混乱をもたらすだけで、なんの実践的な意義を示しうるものではない。

ところで、戦后世界体制の動揺と、日本経済の構造的不況の深まりは、戦后日本帝国主義の歴史的脆弱性を一挙に非和解的なものに転化した。日本帝国主義の体制的危機は、まさに、戦后日本階級闘争によつて歴史的に規制されていることを決定的な条件と

宗）にたいする貴族や旧王城仏教（天台・真言宗、南都諸宗）僧侶の反動的イデオロギーとしてそれは継承されてきたが、それにしても、例の神武正統記の北畠親房すら「神武即位は神代のこと」として現古の歴史と区別していたほどであつた。いわゆる神国思想が一定の民衆的影響をもちだすのは、幕藩封建性の崩壊期になつてからであるが、本質的には、徳川封建制とその官学＝朱子学にたいする直接的対立物として古代日本の「自然主義」が憧憬された ものにすぎない。本居宣長を頂点とする国学の興隆と、その急激なる反動化は徳川封建制の崩壊過程との関連においてのみ正しく位置づけることができる。

したがつて、明治政府における皇国神話の暴力的強制は百姓一揆を背景として徳川幕藩体制を打倒しながら、欧米諸列強との対抗上、国家積蓄資金をもつて基幹産業を強行的に振興しなければならない、という日本資本主義の成立の殊殊性を基礎とするものであつた。日本ブルジョアジーは、紀元節に象徴される政治的蒙昧主義をもつて、明治以来の高蓄積とそれにもとづく政治的動揺を暴力的に解決しながら、帝国主義列強国の世界的闘争に参加していつたのである。そしてその過程は同時に天皇制絶対主義を政治的 として資本の本源的蓄積を遂行し、かくして形成された金融資本を基礎にして天皇制絶対主義を内から天皇制ボナパルテイズムに変容させる過程でもあつた。

敗戦、日本帝国主義は、敗戦革命の激動をいわゆる寄生地主層の犠牲のもとに制圧し、天皇制ボナパルテイズムから議会制民主主義への統治形態の転換をはかりながら、国際帝国主義の戦後的な使命と発展を前提として重化学工業化の道を歩んできた。だが、内外の諸情勢の変化のなかで戦后的成長が壁にぶちあたつたとき、ふたたび、紀元節といつた政治的蒙昧主義と結合せねばならないところに日本帝国主義の戦略的脆弱性と、そこから不可避化する政治反動攻撃の狂暴的性格があるといえよう。

政治反動攻撃の突破口

紀元節復活にあたつて第三に確認しなければならない点は、紀元節が、たんなる反動イデオロギー攻撃のみならず、小選挙区制―七〇年安保再改定に集約される政治反動攻撃の文字通りの突破口を、なしているということである。

社会党および共産党は、昨年春の国会において自民党が祝日法案を強行採決したとき、これにたいする反対闘争を院内外でともに放棄し、祝日問題審議会の答申にもとづく政府決定という最悪の方法をもつて対応したのであつた。五七年に建国記念日問題が生起したとき、院内外を通して反対闘争を展開した社会党・共産党は、十年たつた今日、かくも無残な後退を示したのである。

このような社共の政治闘争の無力化はけつして既成指導部の軟術的誤謬に帰結しうるものではない。それは、一方では、既成左翼指導部の安保以来の底知れぬ後退と堕落を意味するものであるが、他方では、それは日本帝国主義の体制的急機をかけた政治反動攻撃の激しさをも意味しているのである。したがつて、日本帝国主義の政治反動攻撃との闘争は、必然的に、日帝への思想的屈服を深める既成左翼指導部をのりこえるものとして意識的に追究されねばならない。

総選挙における社会党・共産党の惨敗と民社党・公明党の才二与党的登場は、佐藤自民党政府の居座りと新たな反動攻撃の展開を不可避としている。佐藤自民党政府は、自民党を基軸とした伝統的政治支配体勢の根底的動揺をより露骨な政治攻撃をもつて暴力的に解決しようとしているが、それは同時に、新たな政治的激突を準備せざるをえないであろう。小選挙区制―安保再改定を基本的対決軸とする日本階級闘争の激動は、うたがう余地のない確かさで近づいている。紀元節の復活はその国家制度的突破口以外

しているものであり、また、この点にこそ、日本帝国主義が戦后世界体制の動揺の集中的環としての性格を不可避にせざるをえない最后の要因があるのである。

したがつて、われわれは、紀元節復活を突破口とする政治反動攻撃の激化を日本帝国主義の体制的危機をかけた極めて狂暴な性格をもつたものとして評価しなければならない。紀元節復活の攻撃は、侵略帝国主義としての発展を内的に支えようとする反動的ナショナリズムの制度的支柱の確立を「期待される人間像」や家制改革に象徴される公教育の国家統制を一方の踏み台として強権的に実現し、それを国家主義的テコとして戦后日本に伝統的な政治的・社会的意識を強権的に再編成しようとする、このうえなく狂暴な性格をもつているのである。

紀元節と政治的蒙昧主義

紀元節復活にあたつて、第二に確認しなければならない点は、日本帝国主義が国民の反動的統合の国家主義的主柱として紀元節のような蒙昧主義的象徴しかもちあわせていないということである。

明治の初年、紀元節制定に関連して、オーストリアの反動的憲法学者シュタインは「神代以来帝室に密着せし神道は、御国にては、国体を維持するに必要なるを似て之を宗教に代用して、おのずから宗教の外にたち、国家精神の帰するところを示すべし。之を尊奉するには、帝室において誕、婚、喪、祭、祝賀、軍旅等はすべて固有の礼を以つて行ない、人民をして知らず知らずこれに帰依せしむること特に肝要なり」と日本高官に進言したといわれるが、敗后日本帝国主義は、その体制的危機を反動的に突破するために、シュタイン以来の政治的蒙昧主義に最后のイデオロギー的支柱にたのむにいたつたのである。

周知のように、紀元節は、日本書紀に神武天皇即位の日として「辛酉正月庚辰朔」と記されているのを一応の歴史的根拠としているが、それは次の二つの理由においてまつたく無意味である。

才一の理由は、神武天皇神話そのものが完全なる政治的作文であることである。もちろん、日本書紀が古代日本の専制支配者たちの政治的伝承たる帝紀および本辞を典拠として作成された以上、古代日本に関する一定の伝承を反映していることは否定しえない。だが、崇神以后は科学的批判という面から検討の必要あるといえ、それ以前の皇紀が一片の科学的根拠すらもつていないこともまた今日では学問的常識である。もともと、神武即位の日なるものは、中国の辛酉革命説をもとに推古帝九年（西暦六〇一年）を二一元（一二六〇年）上積みしたもの（西暦前六六〇年）であるが、暦法が定まつたのが中国では春秋后二六四年（西暦前二一四年）、日本では推古帝一二年（西暦六〇四年）であることからしても、西暦前六六〇年に即位したという記述そのものが、この神話の人為的性格を暴露している。

紀記の神武伝承なるものは、天武天皇十年（西暦六八二年）に記定した帝紀および本辞を基礎に養老四年（西暦七二〇年）に撰上された日本書紀にもとづくものであり、したがつてまた、それは古代王朝の高揚と急機のなかで、天皇制強化の要請にもとづいて編述されたものなのである。

才二の理由は、天皇制強化のこのような努力にもかかわらず、奈良朝末期以后、古代天皇制伝承なるものは、民衆の意識はもちろんのこと貴族階級の内部でも形骸化してしまつており、明治政府が暴力的に強制するまで民衆的意識表象には無縁なものになつていたことである。それゆえ、ギリシヤ神話や宗教的起源と比較することじしんが、どだい無理な話である。

もちろん、皇国史観なるものは完全に消滅してしまつたというわけでもなく、中世以后、新興武士階級や新興新教（とくに浄土

のなにものでもない。

したがつて、われわれは、紀元節問題のもつ反動的意図を日本帝国主義の体制的危機との関連において徹底的に暴露するとともに、紀元節復活に反対する闘争を自己完結的に提起することなく、小選挙区制―安保再改定を基軸として砂川基地拡張・原子空母寄港・消費者米価値上げ・国立大学費値上げ等、佐藤自民党政府の具体的な諸攻撃と結びつけて打ち倒していくことが必要である。

紀元節復活をめぐる階級関係は、むしろ、日本帝国主義の構造的脆弱性を露骨に示している。戦前はいざ知らず、戦后民主主義を政治的揺籃として育つた日本労働者階級の主力は、自己の紀元を蒙昧のうちにしか表現しえぬ日本帝国主義にたいして、けつして屈服することはないであろう。日本建国の日は、ただ、国家の死滅の展望をそのうちに内包した労働者国家の樹立という形態をとつて実現されるにちがいない。それは、紀元節という国家主義的行事との断えざる対決をも政治的・思想的契機とした日本帝国主義打倒の闘いの内に現実の起源をもつている。

深まりゆくアジア危機と紀元節

一九七〇年一月三〇日　発　行

編集・発行　反　戦　高　協　中　央　書　記　局

東京都豊島区東池袋2の62の9

前進社気付

定　価　一〇〇円